KSK まちの仲間

第18号

発行日　1999年6月16日
編集人　横浜市グループホーム連絡会
横浜市中区本牧満坂10本牧生活の家内
TEL 045(623)5318 FAX 045(623)5319

昭和51年12月22日第3種郵便物許可
KSK 増刊通巻2319(毎月12回2・3・4・5の付く日発行)

質を問われる時代に向かって

横浜市グループホーム連絡会
会長　室津滋樹

昨年八月、私たちは他団体の方々と共同で神奈川県下二三六ケ所のグループホームの実態調査を行いました。

これまでの、施設中心の福祉への反省から地域福祉が求められるようになり、地域での生活支援の一つとして、グループホームはスタートしました。しかし、今なお重度の障害者は地域生活ではなく、施設が必要とする主張も根強く、また、一方では、地域での生活というのは、一人暮らしや、自分の家庭を持つことであり、グループホームは結局小規模施設であるから、グループホームもいらないという主張もあります。

施設福祉から地域福祉への転換の象徴として、グループホームは期待を集めてきましたが、実際にグループホームでの生活や援助は施設が持つ問題をどこまで克服しているのでしょうか。言い換えると、グループホームは施設とは異なる地域での暮らしとなっているのか、あるいは、よりましな小規模施設に過ぎないのかということです。グループホームが地域福祉の中で果たしている役割や、グループホームでの生活の質の実態を明らかにする事が今回の調査の目的の一つでした。

また、障害を持つ人達が地域で暮らし続けるために、特に多くの援助を必要とする重い障害を持つ人達がグループホームで暮らし続けていくために、必要な条件（職員体制やグループホームへの支援のあり方）は何なのかを検討していくために現状を明らかにすることも、大きな目的でした。

運営方式の違いによる長所や問題点についても、明らかにしたい課題でした。

とりあえず、膨大な集計の作業を多くの方々の協力により終了し、報告書としてまとめることができましたが、これから、さらに、分析と検討が必要です。

今回の調査を終えて、グループホームであるというだけで、評価される時代は終わったと痛感しています。問題のあるグループホームも現実にあり、そのことも含めて、グループホームの実態として報告書に記載しました。多くの批判にさらされることにより、グループホームの質が高まっていくことを願ってやみません。

神奈川県グループホームの実態調査を終えて

昨年八月、神奈川県下二三六ヵ所のグループホーム（入居者総数一〇九五人）を対象とした実態調査を実施しました。この調査は県知的障害施設団体連合会（旧県愛護）の生活ホーム部会で過去二回実施されたものを、今回は団体の枠をこえ、川崎生活ホーム連絡会、当連絡会も加わり、知的障害、身体障害のグループホームすべてを対象とする大規模な調査になりました。

また調査対象を運営主体、入居者本人、援助職員、家族、県内全施設に分け、それぞれの立場から意見を聞くことを試みました。

以下、当連絡会で各分野に関わった担当者に調査報告をまとめての感想を寄せていただきました。

運営主体調査をまとめて

運営主体調査では、グループホームへの支援のあり方を検討するために、入居者への様々な支援を誰が行っているか、また誰が行うべきと考えているかを聞きました。

余暇活動支援や、外出時の付添、財産管理などは、ホームではなく他の機関が実施すべきと考えているホームが多いのですが、現実には支援できていなかったり、運営主体、職員、家族が行っている実態が明らかになっています。

また、医療については、不安を訴えるホームが多くありました。医療についての援助は多くのホームで入居者の普段の様子を知っている職員がやるべきと考えていますが、深刻なのは入院時の付添などの援助です。ホームの他の入居者への援助を行いながら、同時に病院で付添が必要となり、現在の職員体制ではきわめて困難です。必要だが実施できていない、あるいは家族が行っているというホームが多くありました。

また、ホームへの入居や他のホームへの移動を誰が決めるのかという問いに対し、本人の同意がないまま、入居や他のホームへの移動を決めているホームが少なからずありました。入居者の自己決定を大切にしながら暮らしているはずのグループホームでこの様な結果が出たことは大変残念です。

支援のあり方、グループホームの今後のあり方をこの調査結果は突きつけています。（室津滋樹）

入居者本人調査をまとめて

グループホーム入居の理由では「自立したかった」「ホームで暮らしてみたかった」が五割を占めています。「知らないうちに」と答えた人が若干あり、これは非常に残念です。

住環境については、横浜は個室の割合が高い結果が出ています。これはホーム設置時の助成があることと関係しているのでしょう。

ところが自分の部屋に断りなく勝手に人が入りますかという質問に対して「入る」と答えた人の数は個室でも意外と多く、関係者の権利意識の高揚にかかる課題です。

またホームでの暮らしについては、「ホームでの生活が楽しい」「ホームに入居してよかった」という回答もたくさんありました。

でも最も切実なのは「将来への不安」でした。「ホームにいくつまでいられるのか」「年をとった時にホームにいられるのか」「仕事がなくなってもホームにいられるのか」「助けてくれる人がいつもいてくれるのか」など、グループホームを自分が一生暮らすところとして考えていけるのかどうか不安に思っている入居者の気持ちがたくさん伝わってきました。

将来については半数が「グルー

プホームでの暮らし」、「一人暮らし」「結婚」などホームを出て暮らすことを望む人が二割でした。この質問で本人から施設での暮らしを希望する声はほとんどありませんでしたが、他の質問では「ホームは若者がいるところ」などの回答もあり、入居者の気持ちに今の制度の弱さが反映していました。入居者の望む暮らしが実現できることを願っています。（室津茂美）

職員（世話人）調査をまとめて

今回の調査結果から、一言で職員といっても様々な就労形態があることがわかりました。例えば横浜の運営委員会方式では九割以上がフルタイムなのに対し、バックアップ施設のあるホームではフルタイムの職員が四割強、バックアップ施設と兼務が二割強、パートやアルバイトが二割強でした。

グループホームに携わる人々で「職員をしていてよかった」と感じている人が全体の七割に達していたのに対し、「仕事の長期継続が可能」と答えた人は残念ながら四割に下がっています。

職員の仕事は入居者の生活全般に関わっています。家事全般、通院の付添や病気時の昼間の対応、お金の管理の援助、外部との調整や事務仕事、入居者一人一人への気配りなど盛りだくさん。入居者の生活を支えていくには決められた業務時間だけでは難しく、残業が日常化しています。このような苛酷な就労状況はこの結果を導き出す一因と考えられます。

また小さな単位の生活の場を支援するこれらの人々には孤立感もあります。職員集団も小規模で泊りも一人でこなし、スタッフ相互で交流したり調整をとる時間もなかなかとれないでいます。

障害のある人が地域で安心して生活を継続するにはこの様な職員の就労状況を解決して行く必要があります。又、グループホーム制度だけでなく、ホームヘルプ制度やガイドヘルプ制度の充実により、地域でグループホームを支えるシステムの整備が必要です。

そして同じ悩みを共有し解決の道を探るための研修や、交流を深める「職員部会」の役割も重要になってくるでしょう。（早川　毅）

家族調査をまとめて

この機会に、日頃聞くことの少ない家族の率直な思いを聞きたいと思い、協力をお願いしました。

回答してくださった方はやはり親が七割を越え、平均年令は五九歳、最高齢の方は八九歳でした。

入居者は二〇から三〇歳代が七割と多く、ホームが親なき後の居場所ではなく、親が若いうちから将来の生活を考えて選択しているものと思われます。

グループホーム入居後の親きょうだいの生活の変化では、何よりも「心と時間にゆとりが持てるようになった」との回答が多く、本人との関係についても「愛おしく思う」「お互いに思いやりが持てるようになった」「父親との関係がよくなった」といった回答が寄せられました。このような変化は、将来の不安が少し軽減されていることによるのかもしれません。

しかし、一方でグループホームの運営や援助体制に不安を感じているという意見もたくさんありました。家族や本人の健康、高齢化が大きな心配となっており、「親なき後もこのまま生活していけるのだろうか」「土日や夏冬の実家への帰宅は楽しみな一方で将来への負担」「三六八五日過ごせないホームで先々、生活の場となるのだろうか」等、自由記述の空白をびっしり埋める意見がたくさんありました。また子が援助を受けていることを考えての気遣いが感じられる回答もありました。

家族の切実な声がグループホームが安心して暮らせる生活の場となるためのものであってほしいと願っています。（原田南海子）

ところの森 Yuki

「岩の高人」いわきりよしひろ

「坂井北一」ふるいそういち

おたにみきーみつよ

おいとおむ

アムールの仲間

皆んなと仲良しています。

皆んなでがんばってください

よろしくお願いします。

おおたきさろう

あたけともゆ

くぼやまさー

新しいグループホームだよ〜

仲間がこんなにふえました

あおば　つづき　こうほく　つるみ　みどり　かながわ　にし　なか　せや　あさひ　ほどがや　みなみ　いずみ　とつか　こうなん　いそご　さがえ　かなざわ

ゆうあい港南

友　愛

ゆうあい港南でテレビを見たり

ゲームをしたりしています

北村忠司

加藤正樹　よろしくおねがいします、

みんなたのしかった。

ひろいしゅんじ

田中豪

ドリームはんす

◎青山明子
・買い物好き
・動物好き
・アニメビデオ好き
・太陽になる好き

◎細谷安広
・いつもお気に入りはブルーハーブ
・電車にのること好き
・お酒好き
・色んな人好き

◎ほのぼのこんどう　ひろこ
・お風呂好き・演歌好き
・ドライブ好き・コーヒー、コーラ好き
・空手のプロス作業好き
・色んな人好き

◎近藤誠志
・青楽好き・ドライブ好き
・散歩好き・「カサエさん」好き

オアシス

木村さん　オペラが大好きです。

村木さん　ぬいぐるみとあそぶことがすき

川崎さん　買いものが楽しいです

平田さん　いちごがすきです

河野さん　とにかくヤクルトがすき！

ふれんど菅田Ⅱ

大塚健史　スロットマシーンがすき

加藤美幸　ミッキー　すき♡

吉田和弘　写真　すきー

鈴木大祐　盆人　優勝

ふれんど菅田Ⅰ

水村誠　料理がすき

浦辺留美子　音楽♪♫すき

原口雄一郎　将棋がすき8

松本知広　ゲームがすきー　Go2

ハイツきさらぎ

はじめまして神谷富夫です

バーベキューにいってとても

たのしかったです。いわ藤剛

青木勝男

こんにちわ

沼尻元〜

小島のおちゃん

ビデオ

「街に暮らす」

入居者部会での上映会より

この「街に暮らす」というビデオは、日本財団が制作したものです。同財団では、以前に同じタイトルでスウェーデンの地域生活支援のビデオを制作しています。今回上映された「街に暮らす」は、日本での地域生活援助の実践を取材した「日本版」です。

一月二十三日の入居者部会でビデオを見て皆で話し合いました。

上映会の様子は…

施設

北海道のある施設では、大勢で暮らしています。部屋は二人部屋です。ジュースを週に一度だけ、みんなでそろって買いに行くところがありました。これを見て、「自動販売機の前に一列に並んでいるのを見て驚いた」

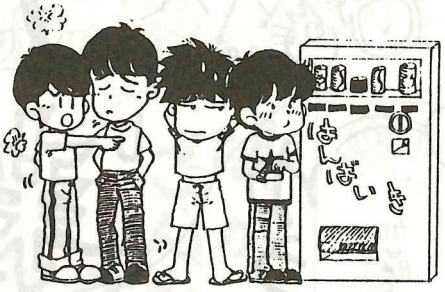
「一週間に一本のジュースは信じられない」

「自分たちはグループホームで好きなジュースを買えてよかった」

という感想がでました。

洗濯する部屋などに、かぎがかかっていたり、窓が開かないようになっている施設があるのを見て、施設入所の経験のある人は、

「かぎがかかっていてきびしいなあ」と言っていました。



グループホーム

大阪のグループホーム。重い知的障害をもつ双子の兄弟が親元を離れ、別々のグループホームで暮らしていました。発作を起こしたり、作業所に行くのにとても時間がかかったりしましたが、だんだん慣れてきて、職員と一緒に銭湯に行ったり、喫茶店に行ったりするようになりました。それに対し、

「社会に出て刺激を受けて少しずつ変わっていくのがすごい」

「男の人のこと心配」

「がんばっているからいいと思う」

など、多くの意見がでました。

また、休みの日にガイドヘルパーと一緒に出かけるのを見て、

「いいなあ」

「うらやましい、自分もヘルパーさんと一緒に出かけたい」

などの声もあがりました。

「二十四時間、三六五日型のグループホームになってほしい」

「施設の方がグループホームよりたくさん増えるのに驚いた」

という意見もありました。

結婚と出産

通勤寮で知り合って結婚した二人は、寮を出て、県営住宅で暮らしています。二人とも就労しています。できることは、二人で協力してやっていますが、必要なことは寮の職員に手伝ってもらって、出産し、育児をしています。

赤ちゃんが生まれてお風呂に入れたり、おむつをかえたりしているのを見て、

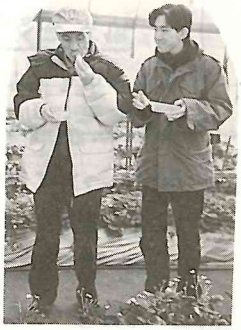
「感動した」

「一生懸命育てているのでよかった」

「手助けなしには自分にはできない」

などという感想がきかれました。

いちごがり　バスの　おんせん　たび



入居者部会で企画したバスハイクが、二月十一日にありました。

入居者部会のみんなで、千葉県に行ってきました。あいにくの天気でしたが、いちごがり、温泉と元気いっぱい楽しみました。でも、今度は暖かくて晴れた日にどこかへ行きたいですね。

バスハイクの感想

さくらの家　永田　孝

入居者部会でさいしょははこねにバスハイクにいくよていでしたが、ホテルの都合で計画どおりにできなくて、二月十一日（木）にちばけんのいちごがりと、ホテル三日月に昼食と温泉にいきました。来た人は百人かもっといたようなきがしました。

みんなのいけんは、おふろがひろくてよかった。ろてんぶろもごうか、食事もごうかだった。てんきがはれてくれたらもっとよかった。イチゴがおいしかった。

俳句

いちごがり
日だまりに手を
のばしけり

本牧生活の家　桑原

◇お知らせ◇

神奈川県グループホームの実態調査報告書が必要な方は左記へ

横浜市在宅障害者援護協会
TEL　045－471－0556
FAX　045－471－0559
一部　一五〇〇円（送料込）

報告書に関するシンポジウムが左記の通り開催されます。

日時　七月十六日（金）
午前十時～午後三時三十分

場所　横浜市健康福祉総合センター
（桜木町駅前）
4Fホール

かいらんばん　職員の意見交換誌

勤務の関係で、グループホームの職員同士で会って、話をする機会がなかなかありません。が、そこに強い味方が――その名は「かいらんばん」。職員部会で発行している職員による職員のための意見交換誌です。

内容は、毎回出されるテーマについて（今回は「新年度にむけて」）、自分が考えていること、悩み相談、得意料理の紹介など、何でもありです。教えられること、励まされること、発見することなどたくさんあります。毎回心待ちにしています。

文章だけで会ったことがない人もいますが、「かいらんばん」を読んでいると、皆、仲間なのだなと感じます。次の号も楽しみ。でも、読むばかりでなく原稿を書かなくては…。

（岩永　美恵子）

協力会員募集！

まちの中でくらしている障害者の姿や声をお届けする機関紙「まちの中で」を発行しつづけるためにご支援をお願いいたします。

会費（年）1口 2000円

振替…00280-7-73608
横浜市グループホーム連絡会

☆協力会員になっていただいた方には機関紙をお送りいたします。

基金づくりにご協力を！

グループホーム運営支援基金のために
みなさまのお手元でねむっている未使用のテレフォンカード，オレンジカード，ビール券，商品券などのご寄付をお願いします。

送り先・横浜市グループホーム連絡会事務局
〒231 横浜市中区本牧満坂10
本牧生活の家 045-623-5318

新年度の協力会費振り込みお願いいたします

阪神大震災にあった障害者を支援するためのTシャツの販売を職員部会で行っております。お問い合わせは上記まで。
尚，「阪神大震災カンパ」の方は終了いたしました。ご協力ありがとうございました。

～ありがとうございました～（'98.9.1～'99.5.31）敬称略

寄付　青木千順子

テレフォンカード・その他商品券　小泉弘美　山田孝子　長栄伸子　室津滋樹　板垣道夫　加藤常夫　沢本とし子　田中勝　地域生活情報センター　安田綾子　大津京子　石田栢子　鈴木伸　大隅美重子　岩崎和子　飛田利美子　田中栄子　早川康弘・美佐

協力会員　根岸満恵　西岡誉富　早川吉則・美智子　志村重子　橋詰牧子　片桐義英　大隅美重子　早川康弘・美佐　加藤ヨシ子　木戸毅　原田南海子　青木千順子　本多敬子　岩崎知子　雨宮未子　南部トシ子　森下博子　藤尾孝枝　加藤恵美子　近藤元恵

発行人　神奈川県身体障害者団体定期刊行物協会
横浜市港北区鳥山町1752
横浜ラポール3F
編集人　横浜市グループホーム連絡会
横浜市中区本牧満坂10本牧生活の家
TEL 045(623)5318
FAX 045(623)5319
郵便振込番号 00280-7-73608
名称　横浜市グループホーム連絡会
編集責任者　室津　滋樹
定　価　100円